『國民新報』1939年4月23日

文壇慰問使の意義

　として金東仁、朴英熙、林學洙三氏が、る十五日へつた。のがにられたことはに一であり、一をするものでしてではない。

　のはだそのがくの人にされて居ない。それは歴史が若いのと、の朝鮮が文學、に對してとのいのによる。

　今日の朝鮮文學はそのにおいて、において、已にをしたのみならず、その殊にに對するにおいて、實にくべきものがある。他に多くの讀物を持た[せ]ない朝鮮においては、文學は一のな感化力をすることをしてはならない。

　るに、この朝鮮文學は、だつて、國民的によつていた例がなかつたのである。朝鮮の新文學は民族をとしとしてつたものでの作品は、文學的であると云ふよりは一種のイデオロギー的のものであつた。

　もつとにえば、にれることをけて居たのであつた。に、さへされ、一しきりにはマルキシズムのをびたでなければみないとふもあり、のとのと、いはゆるのとふなはあつたが、として、においてられたはなかつた。

　それがこののの皇軍をとして左右共のをしりじに乗り一となつたのである。においてもにおいても、このにをして、々のをり、のをへられたかにいてゐる。これこそはのによる、めてののとなのであつて、それのみにてもになものであるが、いて、やがてこのによりのとと、における、のがまれ、ここにしくしたが、――殊にのたるににくきをへるかはいふまでもない。